

「ある日の昼ごはん」を見て話そう

～大学の留学生と中学生とのオンライン交流授業～

氏名： 上田 安希子 学校名： 京都教育大学
 担当教科： 日本語アカデミックスキル 実践教科： 日本語アカデミックスキル
 時間数： 3 時間 対象学年： 留学生・中 1・中 2・中 3
 人数： 留学生 14 名(タイ4・韓国2・ウクライナ 2・中国1・ウズベキスタン 1・トルコ1・ブラジル 1・ポーランド1)
 大阪市立玉津中学校 1 年生 5 名・2 年生 6 名・3 年生 7 名

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

留学生側：

- ①日本の中学生たちとオンラインで直接話すことにより、リアルな「日本」を知る
- ②日本の中学生に向けて自国のことを伝える
- ③日本語が伝わる・理解できる楽しさを味わい今後の学習につなげる
- ④「ある日の昼ごはん」を題材に各国の食の事情を知り、さまざまな食文化を知る

中学生側：

- ①留学生たちとオンラインで直接話すことにより、リアルな「海外事情」を知る
- ②留学生たちに向けて日本のことを伝える（わかりやすく伝える、伝わる楽しさを知る）
- ③日本以外の国のことに関心をもつきっかけとする
- ④「ある日の昼ごはん」を題材に諸外国の食の事情に関心を持ち、さまざまな食文化について考えるきっかけとする

【2】 単元の評価 規準例	(ア) 知識・技能	留学生側： ・中学生との対話を通して日本を理解することができる ・日本語を使って自国のことを発信し伝えることができる 中学生側： ・留学生との対話を通して諸外国のことを知ることができる ・日本語を使って自分や日本のことを伝えることができる
	(イ) 思考・判断・表現	留学生側： ・日本にさらに興味を持ち、違いを受け入れ、自分の考えなどを伝えることができる 中学生側： ・諸外国の事情に関心を持ち、違いを受け入れ、自分の考えなどを伝えることができる
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	留学生側： ・学習言語である日本語を積極的に使い、日本をより知ろうという意欲を養う 中学生側： ・諸外国の事情を聞き、知りたいと思ったことを積極的に聞く、調べる意欲を養う

<p>【3】 単元設定の理由</p>	<p>今年度、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、留学生がなかなか来日できず、オンライン留学、つまり国から接続して授業を受けているという状況が続いている。そんな中、留学生たちが、教師とのやり取りや文献・インターネットから得られる情報だけでなく、直接日本を知り、体験できる方法はないかと考えていた。一方、教師研修に参加していた教員たちの学校現場でも、自粛が長引き、海外旅行などもままならない中、生徒たちに「多文化」に触れさせる機会があまり得られないということも耳にした。そこで、来日できない留学生と日本にいる小中高の児童・生徒たちをオンラインで交流させることが実現できないかと考えたのがこの授業を考案した動機である。そんな中、大阪市立玉津中学校の中学生 18 名と、放課後の時間を使って交流をさせていただく機会を得た。</p> <p>本学の今学期の日本語アカデミックスキルの留学生たちは日本語レベルは中級から上級で、日本についての知識もそれぞれにかなりある。ただ、それがやはりインターネットを通じた情報から得ている日本文化のイメージに偏っているところは否めず、生の日本人と触れ合うことで、本当の意味での多文化を知るきっかけとしてほしいと思った。</p> <p>このコロナ禍での世の中の変化により、さまざまな学校現場でオンライン授業の環境が進み、オンラインでつながって世界中の人とリアルタイムに話せるということが可能になっている。この利点を生かして、その国に行かなくても、国や文化の違う人と交流することができるという現代の新しい国際交流の形を留学生、中学生のどちらにも体験してもらいたいという狙いもある。</p> <p>交流のテーマとしては、中学生と大学の留学生どちらにも話しやすい「食」をとりあげ、主に普段どんな昼ごはんを食べるかという話題を通して各国の食を取り巻く事情について考えるきっかけとしてほしいと思った。</p>
-------------------------------	--

【4】 展開計画 (全 3 コマ) ※1 コマ 90 分

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	<ul style="list-style-type: none"> ●中学生にわかりやすい自己紹介を考える ●出身の町について簡潔にわかりやすく伝える方法を考える ●昼ごはんについて簡潔に伝えるような説明を考える 	<p>【留学生向け授業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイントのスライドを使用し、1 分間自己紹介を準備する。 ・スクリプトも準備し、オンラインで中学生に伝わるかどうかという観点で語彙や表現などをよく検討して完成、練習して準備をする。 ・「ある日の昼ごはん」の写真を撮り、その食事の味、材料、作り方などを簡単に説明できるよう準備する。 <p>【資料 1】</p>	Powerpoint スライド
2 本時	<ul style="list-style-type: none"> ●相手に伝わりやすい自己紹介をする ●中学生の自己紹介を聞いて理解する ●中学生の昼ごはん（給食）について知る ●昼ごはんを通して、各国の食をとりまく事情について考える 	<p>【留学生・中学生交流授業】</p> <p>参加者紹介、注意事項 ↓ 〈グループに分かれる〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ①留学生の自己紹介 (1 分×3~4 名) <5 分> ②中学生自己紹介 <5 分> ③中学生たちの昼ごはん (給食) <5 分> ④留学生たちの昼ごはん ⑤「昼ごはん」について質問タイム・自由に話す <25 分> 	PC、スピーカー Microsoft Teams Powerpoint スライド (給食の写真、昼ごはんの写真なども入れたもの)

	<p>●対話を通して、日本とさまざまな国に対する理解を深める</p>	<p>⑥（時間が余ったら）自由テーマで質問タイム ↓ 〈全体に戻り〉 ⑦まとめ 各グループ 代表者（留学生・中学生）からのひと言 <10分> ↓ 終わりのあいさつ</p>	
<p>3</p>	<p>●活動を振り返り、学んだことを整理する ●クラスメートと、交流の間に話したこと、感じたことなどを共有し、話し合う ●中学生にお礼の手紙を書くことで、交流の感想を伝える</p>	<p>【留学生向け授業】 ・グループ内で、どんな話をしたか、そのときどう思ったかななどを共有し、話し合う。 ・生じた疑問などについても話し合う。 ・ワークシートに、活動の振り返りを記入する。 ・パワーポイントのスライド1枚に、中学生へのお礼のメッセージをまとめ、自国のあいさつを入れる</p>	<p>Microsoft Teams 振り返りワークシート Powerpoint スライド</p>

【5】本時の展開			
過程時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (10分)	<p>○あいさつ、参加者の紹介 交流の流れ説明、注意事項の確認</p> <p>○グループに分かれる (中学生のグループ2・3・4は別教室に移動、留学生はブレイクアウトルーム機能で4つのグループに振り分ける)</p>	<p>・交流に参加してくれた玉津中の中学生と教員のみなさんが、どんな国のどんな留学生と交流するかわかるように、名前を呼んで、返事をしてもらう</p> <p>・交流の流れがわかるようにスライドで説明する</p>	<p>・PC (オンライン会議ツールとしてはMicrosoft Teamsを使用)</p> <p>・Powerpoint スライド 【資料2】</p>
展開 (40分)	<p>○留学生(1グループに3~4人)から順番に1分間自己紹介(【資料1】)をする</p> <p>○中学生(1グループに4人~5人)から順番に自己紹介をする</p> <p>○中学生から給食の写真(【資料3】)を見せ、簡単に説明する。留学生から聞きたいことを自由に聞く</p> <p>○留学生から、一人ずつ順に「私のある日の昼ごはん」(【資料4】)の写真を見せて、簡単に説明する。中学生から聞きたいことを自由に聞く。</p> <p>○全体に戻る(中学生は教室を移動、留学生はブレイクアウトルームを終了)</p>	<p>・4つのグループを順次まわり、交流がスムーズにしているか確認する(映像、音声の状態も安定しているか確認)</p> <p>・対話が途絶えていたり、意思疎通がうまくいっていないグループがあれば、支援する</p>	<p>・Powerpoint スライド 【資料1】 【資料3】 【資料4】</p>
まとめ (10分)	<p>○各グループ代表から、感想を一言ずつ言う(留学生・中学生)</p> <p>○終わりのあいさつ</p>		

【授業実践の様子】（本時での写真を添し、キャプションをつけて下さい）



【資料 1】 留学生が作成した 1 分間スライドの例



【資料 2】 活動の流れの説明用スライド



【資料 3】 玉津中学校の給食



【資料 4】 留学生の「わたしのある日の昼ごはん」の例



【資料 5】 交流中の様子（全体）



【資料 6】 交流中の様子（グループ 3）



【資料 7】 交流中の様子（グループ 4）

【6】 本時の振り返り

玉津中学校のみなさんにあいさつをし、玉津中学校の生徒たちがみな退出した後、休憩をはさんで、留学生のみ、再度ブレイクアウトルーム機能でグループごとに分かれ、振り返りを行った。グループの中で、活動がどうだったか、どんな話があったかなどを共有した。

全体に戻り、グループごとに報告してもらおうと、「本当に楽しかった」「中学生たちがとても元気でおもしろかった」という感想がほとんどだった。楽しかったという感想ばかりでなく、短い交流であったにも関わらず、学生たちは同じグループで話した中学生たちにとっても親近感を持ち、また彼らが着ている制服や、給食、教えてもらった大阪のおすすめの場所、大阪の言葉についてなどとても興味を持った

ようだった。

特に、給食については、「コッペパン」という言葉がうまく聞き取れなかったようで、給食のメニューにあったパンの名前について話していたグループが多かった。また、写真に写っていた牛乳についても、「どんなメニューにもかならず牛乳がついていていつも一緒に飲む」と中学生たちから聞き、「ごはんと牛乳は合わないと思う」と、驚いていた。給食については「初めて見て、おいしそうだった」というコメントや、自国の給食などと比べた感想が多くみられ、それぞれに関心を深めたようだった。

その後、それぞれワークシートに感想や気づいたことを記入してもらった。また、交流に参加してくれた中学生たちにお礼の気持ちを表すため、メッセージカード（Powerpoint スライド 1 枚）を書いてもらった。留学生たちの言語に関心を持ってもらうきっかけになればと思い、メッセージの最後に、自分の国の言葉でひと言あいさつ（読み方・日本語での意味も併記）を添えるよう促した。



【資料 8】留学生が作成したお礼のカードの例

【7】単元を通した学生の反応/変化

<留学生側の反応>

以下に挙げたものは、振り返りシートに書かれた感想（活動全体を通して）の一部である。※原文ママ

・生徒たちが本当に明るくて元気だと思ったし、何よりも幼い生徒たちであるにもかかわらず、非常に礼儀正しいという感じがしてすごいと思った。

・私たちは様々なことを交流できました。交流するうちに、色々な知らなかったことを理解できるようになって、珍しい経験だったと思います。この交流は僕の忘れられないで素敵な思い出になりました。皆さんと一緒に交流できて、とても嬉しく思います。

・今まで日本の中学生と話したことがないので、いろいろなことについて話して、そういう経験がとても面白かったです。交流できてありがたいと思います。

・中学生たちが最初から僕達と仲良くしてくれて、僕達と僕達の国の文化について興味を持って、コミュニケーションをちゃんとするような努力をして会話はとても自然に流れました。多分僕達留学生のほうはちょっと緊張とか不安や恥ずかしさがあって、中学生たちの優しさがとても助かりました。

それにみんながほんまに元気でにぎやかだったので僕達も盛り上がってきまして面白くて楽しい時間を過ごすことが出来ました。特にフリータイムに恋バナの話を聞かれた時でした。びっくりしましたが、初恋のアドバイスとかみんなが付き合ってるかどうかの話やタイプについて話したりして、中学生たちが先生も巻き込んで、面白いでした。みんなが爆笑して、笑顔で会話したことは多分僕にとって今日の大切な思い出になりました。

中学生に対して、「明るくて元気」「礼儀正しい」「やさしい」という印象を持っており、自分たちと「仲

良く」してくれ、自分たちの国の文化について「興味を持って」くれたことはとてもうれしかったという感想がみられた。

<中学生側の反応>

中学生たちも、とても興味津々で楽しく交流に参加しており、グループも時間が足りないというほど盛り上がっていた様子であった。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

<留学生側>

以下のコメントのように、留学生たちが中学生に対して、伝わるように話したり質問したりしたことは、日本語が伝わる楽しさにつながっていると同時に、さらなる学習への意欲を高めることに繋がっている。

・自己紹介したり、いろいろな質問をしたりしたのは、スムーズに話せなくても、面白くてとても楽しかったです。

・時間に合わせることに集中したため、イントネーションや発音などに注意ができなくて生徒たちが少し理解しにくかったのではないかという思いが出た。

次はもっと圧縮してもっと自分をよく表現できるように気を使わなければならないと思った。

・もうちょっと一緒に交流できたらいいのと思うと同時に、私の準備が足りなかったのではないかと反省するようになり、日本語をもっと熱心に勉強しなければならないという決心をするようになった。

とても意味深い交流の時間だった。

<中学生側>

交流後に中学生たちが自発的に書いて送ってくれたメッセージには、「海外の方と話す機会はあまりないので良い経験になった」「今回のお話で海外への興味が増えた気がする」「ぜひ（留学生の国に行ってみたいと思った）といった感想がみられ、留学生たちの話から多くの新しい知識や刺激を得て、日本以外の国に興味を持ち、行ってみたい、知りたいと思う意欲につながっていることがわかった。

また、「海外の方は日本語が苦手だと思っていたけど予想以上に日本語が上手でおどろいた」「皆さんが熱心に日本語を勉強していることを知り、私も勉強を頑張ろうと思った」「日本のことを知って興味をもってくれていることがとても嬉しい」という感想もあり、留学生の頑張りや日本への関心の深さに刺激を受け、学習意欲が強まった様子もうかがえた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】

「ある日の昼ごはん」と「給食の写真」を見て話したところで、以下のような気づきがみられた。

<留学生側>

・Mさんの食事のカッテージチーズは非常に興味深かった。チーズだけを食べながら一食をすませるのはとても西洋的な食事だという気がして、韓国人の私にとってはやはり食事には汁が必要ではないかという気がした。

・栄養バランスがいい給食があるのはとてもいいだと思います。

そして、きれいなプラスチックなトレイできちんと食べ物が載って、爽やかな感じです。

一つの不思議だと思った事は、中華丼、きゅうりやみかんを食べた後、牛乳を飲むことです。

私のイメージでは、これが全然牛乳と合わない食べ物ですが、日本の学校では普通らしいで、びっくりしました。

・グローバル化の世界で毎日の料理が国によってそれほど違わないと思いましたが、Nさんが紹介したカオ・パンパックとSさんが紹介したカタバラトッポッキと言う料理はそれまで聞いたことがありません。美味しそうで、いつか食べてみたいです。

・ウクライナ出身のCさんが見せてくれたのは、ビートで作った「ボルシチ」というスープでした。ポーランドの「バルシチ」と同じのスープだと気づきまして、やはり、ポーランドとウクライナの料理は似ていると思いました。

<中学生側>

中学生たちも、「昼ごはん」の写真を見て話したことで、「日本と近い国なのに、こんなに食の違いがあってびっくりした」「食べ物がとてもおいしそうだったので、ぜひ行って食べてみたい」などと、違いに驚き、興味を持った様子うかがえた。また、たくさん牛乳のことを聞かれたことも、自分たちが普段当たり前だと思っていることに、留学生たちが疑問を持つのだということを感じさせられるきっかけとなり、給食や日本の食についてあらためて考えさせられる機会となっているようだった。

【8】自己評価

1. 苦労した点	<p>オンラインでの交流を実現させるために、何よりもまず、オンラインの接続環境の整備が大きな課題だった。特に、交流相手の玉津中学校は大阪市の規定でMicrosoft Teamsしか使うことができないという事情があった。実践者も玉津中の担当教員も、学外の人と交流するためのTeamの作成、会議室の設定、ブレイクアウトルーム機能の使用に慣れていなかったため、2度のオンラインでの打ち合わせを含めやり取りを多く重ねた。何度かの試行錯誤を経て、実際に玉津中側でも複数の教室にPCを用意し、さらに交流に参加させる留学生（来日できていないため国から接続）にも接続テストに協力してもらい、無事接続し、話すことができることを確認して、当日を迎えた。</p> <p>大方うまくいったが、当日、残念なことに2つのグループで中学生側のPC2台のマイクのトラブルがあり、中学生側の声が留学生たちに聞こえないという状況が20分ほど続いたため、1つのグループでは準備してあった「昼ごはん」のテーマについて話す時間が取れず、自由な会話だけになってしまったということがあった。そのグループについては、せっかく写真を撮ってスライドにも入れて準備した写真について説明できなかったのはとても残念なことだった。</p> <p>また、Microsoft Teamsでは、画面共有をしてプレゼンテーションをする場合、</p>
----------	--

	<p>発表者には自分が画面共有しているスライドしか見えず、聞いてくれている人たちの反応がわからない。そのため、留学生たちが1分間自己紹介をしたり、屋ごはんの写真を見せて説明したりしているとき、みんなの反応が見えず、反応がよくわからなかったという声があった(実践者の知識不足でやり方を知らなかっただけかもしれないが)。Zoomなどほかのツールであればこの問題は解決できたかと思うが、大阪市の場合 Teams のみという規定があったため仕方がなかった。</p> <p>また、交流の内容についてであるが、60分という限られた時間に、14名(8か国)の留学生と18名の中学生が、まずお互いのことを知り、興味をもったことを自由に聞き合うことができるような工夫として、留学生側にあらかじめ準備させた1分間自己紹介に必ず出身の町の場所や特徴を簡潔に入れるようにさせたことがある。このおかげで、中学生たちは交流相手の留学生がどこからオンラインで繋いでいるのかを端的に知ることができ、スムーズに交流に入れたように思う。また、その後の会話のテーマとして、誰もが話しやすく興味を持ちやすい「食」を選んだが、できるだけ身近な自分たちの実生活に沿ったことで話してもらいたいと考え、「ある日の屋ご飯」の写真を見ながら話す、という内容にした。「屋ごはん」は身近なもので、誰にとっても興味を持ちやすく、話が盛り上がるもので、写真を使用したことも、インパクトがあり、記憶に残りやすく、効果的であった。</p>
2. 改善点	<p>接続テストをしっかりと行ったつもりであったが、当日は思わぬトラブルが発生するものなので、もっとしっかりと当日の接続環境と同じにしてテストをしておくべきだと思った。また、万が一マイクのトラブルがあって話ができないなどのトラブルが起きた場合はどのように交流を続けるのか、どのようにして実践者に連絡を取るのかなども、留学生たちに指導しておくべきだったと思う。</p>
3. 成果が出た点	<p>何より、「とても楽しかった」、「なかなかできない経験ができた」、「貴重な時間だった」などという声が多く、すべての学生がこの交流を楽しんだことが最も大きな成果であったと思う。来日することができず国から接続して授業を受けているだけの現在の状況で、さらに11月30日以降海外からの入国を一時停止するという政府の発表を受けて、落胆しやる気を失いそうになっていた学生たちにとって、この活動は、何よりも大きな励みになったようだった。中学生たちから、大阪のおすすめの場所を教えてもらったり、大阪の言葉を教えてもらって、日本への関心がさらに高まり、日本に早く来たいという気持ちがより強くなったという声もあった。</p> <p>日本の中学生たちから、普段教科書やインターネットなどからは学べない日本のことを学べたり、給食や中学生が好きなものなどについて直接の感想を聞いたことで、日本のほんものの現状を知ることにつながったことと思う。たとえば日本の給食について、美味しい、栄養のバランスもよく考えられている、などということは聞いたことがあったとしても、毎日かならずどんなメニューでも牛乳が出て皆が飲んでいるということ、そしてそれに日本人のほとんどは慣れてしまっている、ということは今回交流をするまで留学生たちが知ることのなかったことである。実践者自身も、今回の交流をさせなければ、そのことに留学生のみんなが着目し、驚くとは思いませんでしたので、特に取り上げたことはなかった。このような小さな「ちがひ」であり、日本人も普段は特に意識していないようなことに気づける機会を得</p>

	<p>られるのは、やはり直接交流の良さであろう。</p> <p>また、日本についての気づきを得られただけでなく、留学生どうしも、お互いの昼ごはんを見て、多くの発見があったようである。「皆さんの国の料理はじめて見るものばかりだった」「(ボルシチという料理を見て) ポーランドとウクライナの料理は似ていると思った」「(ウクライナの学生のチーズとマカロニの昼食を見て) チーズだけを食べながら一食をすませるのはとても西洋的な食事だという気がして、韓国人の私にとってはやはり食事には汁が必要ではないかという気がした」など) このように「多文化」を感じる機会は、本来、来日してほかの国の学生と一緒に生活していれば多くあることかと思うが、現在はそれぞれの国にいて、授業だけオンラインで受けている状態なので、ほぼないに等しい。そのような中で、少しではあるがこの交流でその機会が与えられたことも大きな成果と言えよう。</p> <p>また、「違う」ことに気づくだけでなく、「同じなんだ」という気づきも、お互いに多くあったようである。例えば韓国の留学生の宅配デリバリーのパスタとサラダの昼食の写真を見た中学生が、日本と同じようにデリバリーサービスを利用したり、パスタを食べたりするんだな、と知って面白かった、という感想を述べていた。また、交流の間にひとりの中学生が留学生にと薦めた、どちらにとっても馴染みの深い日本のアイドルグループの曲を留学生たちが交流後に聞き、「とてもいい曲だった」「感動した」とお礼手紙の感想に書いていたが、この例のように、同じ音楽をいいと思ったり、感動したりする、という体験を通して、文化の違いを超えた普遍的な何かを知らず知らずのうちに留学生側も中学生たちも感じ取っていたのではないかと思う。</p>
4. 備考（授業者による自由記述）	<p>1で書いたようなマイクのトラブルがあり、しばらく中学生の声が聞こえないという時間があったが、その間、中学生たちが紙に伝えたいことを書いて見せたり、大きめのジェスチャーをして伝えようとしたり、様々な方法を駆使して留学生たちとコミュニケーションを取ろうとした姿がとても印象に残った。お互いに興味を持っていて、とても話したいと思うからこそ、伝える方法を一生懸命探して伝えようとする、これこそがコミュニケーションというものだ、としみじみ思っただけで感動した。その2つのグループの留学生たちも、この姿を見て本当にうれしかったようである。</p> <p>今回の実践は、コロナ禍の今、移動や対面の交流がままならない中、文化を超えて、距離を超えて、時差も超えて、人と人とが語り合い、理解し合うことが可能になるのだということを感じさせてくれるものであり、ある意味、教育において、多文化の接触場面を創出する活動の可能性を見せてくれるものであった。大学において今後担当する多文化共生、国際理解教育の授業においても、学生が直接足を運ぶことができないところにいる人から話を聞いたり、対話したりするための方法として、オンライン交流の方法は今後も活用できるものである。今後、ポストコロナの時代を迎え、再び人的交流や国を超えての移動が元通りに行われるようになって、オンラインの交流と対面の交流のそれぞれの良さを生かした活動を考えていきたい。</p>

参考資料：

『地球の食卓—世界 24 カ国の家族のごはん』開発教育協会 (DEAR) 2010